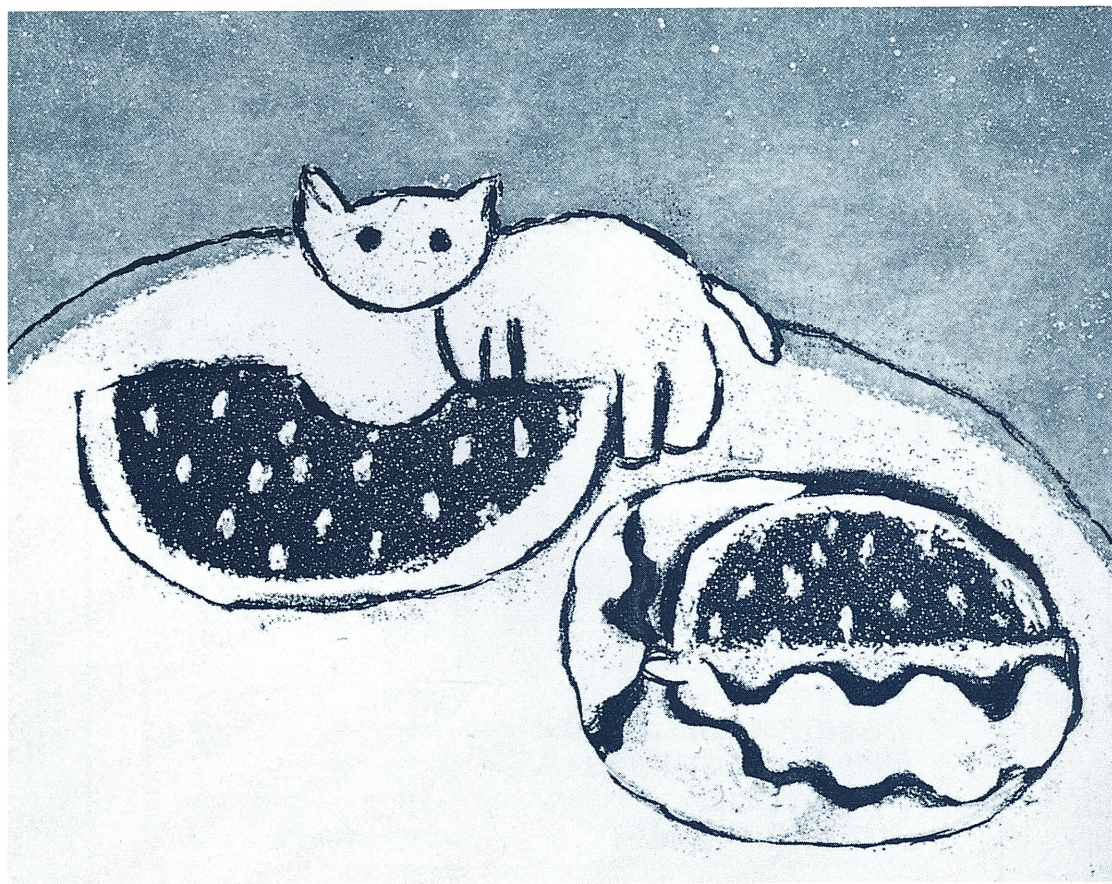


幼児の教育

家庭・保育所・幼稚園

2002年7月号



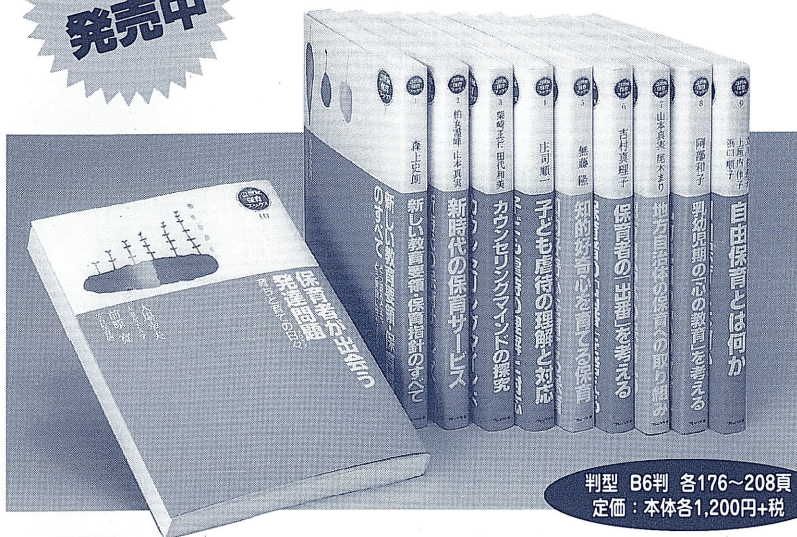
21世紀
保育
ブックス

21世紀保育ブックス

これからの保育はどの方向へと向かっていくのか。
新しい21世紀の保育を展望しながら必要とされる諸問題を根本的に掘り起こし、
確実に保育者を導き育て、将来の保育への指針を与えるシリーズ！

好評
発売中

編集委員 森上史朗 (子どもと保育総合研究所代表)
柴崎正行 (東京家政大学教授)
柏女霊峰 (淑徳大学教授)



判型 B6判 各176~208頁
定価：本体各1,200円+税

既刊本

- ①新しい教育要領・保育指針のすべて
- ②新時代の保育サービス
- ③カウンセリングマインドの探究
- ④子ども虐待の理解と対応
- ⑤知的好奇心を育てる保育
- ⑥保育者の「出番」を考える
- ⑦地方自治体の保育への取り組み
- ⑧乳幼児期の「心の教育」を考える
- ⑨自由保育とは何か
- ⑩保育者が会おう発達問題

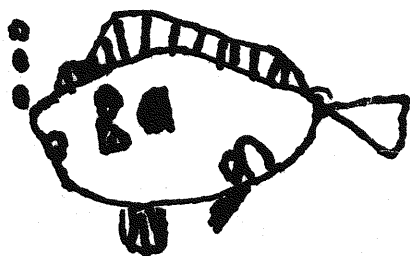
森上史朗 著
柏女霊峰・山本真実 共著
柴崎正行・田代和美 共著
庄司順一 著
無藤 隆 著
吉村真理子 著
山本真実・尾木まり 共著
阿部和子 著
立川多恵子・上垣内伸子・浜口順子 共著
大場幸夫・前原 寛 共著

<以下続刊>

キダーブックの **フレーベル館**

幼児の教育

第101巻 第7号



幼児の教育 目次

—第一〇一卷 第七号—

© 2002
日本幼稚園協会

巻頭言 からだの内側への着目……………片岡 康子…(4)

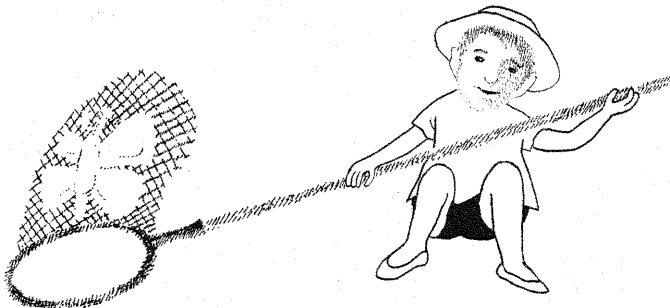
育てられている時代に育てることを学ぶ(7)

—乳幼児教育における「保育教育」—……………金田 利子・岡村由紀子…(9)

ピエール・ブルデューの『実践感覚』を読む

(1)ブルデュー社会学の方法—「序文」を読む—……………安田 尚…(18)

移行対象と児童文学Ⅱ……………井原 成男…(30)



生きもの共存の畝間から(3) 夏野菜の収穫……………徳野 雅仁…(38)

昼間のきょうだい 夜のきょうだい……………森末 哲朗…(40)

おばけとかみなりさま―幼いきょうだいと暮らす―……………藤津 麻里…(47)

幼稚園で過ごした一年……………坂本 衣里…(52)

子どもと環境……………田中三保子…(58)

表紙絵／佐々木麻こ

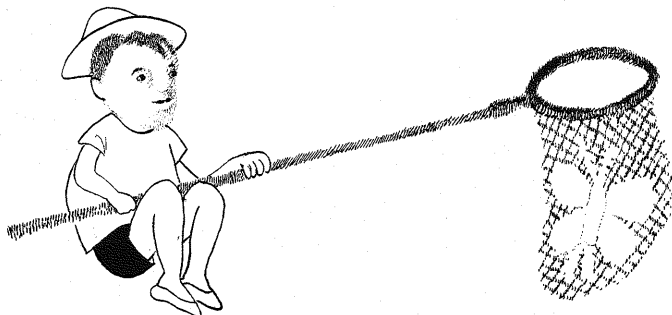
扉題字／津守 真

扉カット／お茶の水女子大学附属幼稚園園児

カット／彌水たたえ「捕虫網」

編集委員／田代 和美・榎田 正子・高橋 陽子

編集部／仲 明子



巻頭言

からだの内側への着目

片岡 康子

ある保育園でのある日、子どもの描いた絵を一人の画家に見てもらったことがきっかけで、その「実験」は始まった。

画家は並べられた絵を丁寧に見終わると「どの絵にも子どものところが素直に表現されていない、子どもが縮こまっている。保育が大人の管理になっていないか」と保母たちにとってシヨッキ

ングな酷評をする。いったい、あたしたちはなにをしてきたんだろう…と、茫然としている保母たちに、画家は一つのヒントを出す。園内には「子どもたちがぎつとおもしろがるだろう」という大人たちの想定で用意したいろいろな遊び道具がいっぱいある。その遊び道具が子どもを縛っているんじゃないか。何もないところへ子どもを放り

出してみたらどうだろう……という、保母たちの常識を揺さぶる提案だった。

さて、半年後。苦言を呈した画家を再び招いて子どもの絵をみてもらう。絵の具をぶちまけたように塗りたくったそれらの絵は、半年前の細い線だけの貧弱な絵を描いていた子どもの絵とは思えない、迫力溢れるものになっていった。

この話は、ジャーナリストの齊藤茂男さんのドキュメンタリーテレビ番組のレポートから得た情報である（註）。

さて、何もない園庭ではいったいどのような子どもの遊びが展開されたのか。

答えは……、そうです、その通り。われわれの子ども頃とまったく同じなのです。

がらんとした園内で子どもは初めのうち戸惑っている。だがしばらくすると自分たちだけで、勝手に園庭に飛び出す。土いじり、ドロいじりで衣

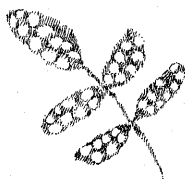
服はたちまち真っ黒になる。そのうちに裸になって、互いにドロを塗りたくって取っ組み合いをしたり、ドロ団子をぶつけあったりする。木登りする子がいる。あちこちでけんかが始まる。保母は仲裁しないことになってるので、けんかは延々と続くが、そのうちに仲直りしてまた一緒に走り回ったりしている。

心底おもしろくてたまらないという顔で遊びに熱中する子どもたちのびっくりするような情景を、カメラマンは密着して撮りまくっていたという。

なぜ、子どもたちの絵は生き返ったのか。

その答えはあるベテラン教師が語った次の言葉の中にある。

「荒れている子どもを見てください、長馬とびとか





押しくらまんじゅうとか、からだをぶつけ合い肌

に触れ合って、思う存分遊んだという経験がないので、体の内面に、もつと子どもをやらしてくれ!、と叫んでいる命の塊みたいなものがあって、暴れたり大声で叫んだりしないと、その内なるものが納得しないんじゃないかと思えるんですよ」

対象のすべては、生きているからだの中に投げ込まれ、生き返り、鳴り響き、からだと交響する。人は宇宙の背後に数学的な法則を発見して驚くが、神秘はまったく同じようにからだにも潜んでいるという事実を忘れていたのではないだろうか。

先日、わたくしの企画したシンポジウムに出演家の鴻上尚史さんに来ていただいた。その折り、「声とからだで遊ぼう」というテーマで展開された『課外授業ようこそ先輩』(NHK放送)の話

をビデオで紹介された。

そして、からだの内側に着目することを喚起された。

運動には二つの方向がある。一つは、からだの外側を意識していく方向。もう一つの方向はからだの内側を意識していく方向。忘れがちなのは内側を意識することであるという指摘であった。

鴻上さんは、からだの内側を意識させながら、自分をさらけだして、子どもたちにつつかっていく。「あなたは声をもっているわけだし、からだをもっているわけだから、それを使うことは楽しいことだよ」

「おもしろかったかい!」

「嘘つけ、そんなもんじゃないだろう」

「どうしたらおもしろくなるかな?」

鴻上さんの子どもたちとのやりとりは、「まず教師自身が楽しむこと、そして子どもと一緒に

おもしろがりやってみること」が基本であること
を教えてくれる。

最近、「子どもたちは意外に疲れている」とい
う声をよく耳にする。

子どもたちはリラックスできない。からだの力
を抜けない。

そんな時は、まず呼吸をゆっくり吐き出すこと
から始めると良い。子どもたちは、吸うことはで
きても深く吐き出すことができない。いや深く吸
うこともできない。ある先生は、泳げない子ども
は息を吐き出せないと言っていた。ダンスでも息
を吐き出すことから始める。息を吐ききれば、か
らだは自然に息を吸い始める。からだの力が抜け
てくる。

息を吐き出して無防備になって、自分のからだ
の内側に着目してみる。すると凝っている肩、ね

じれた背骨、反った腰に気づき、心臓の鼓動、呼
吸する音も聞こえてくる。

そんなからだを忘れていく。

子どもの生きたからだを忘れていく。

教師自身のからだも忘れていく。

与えることだけを考え、与えたことができない
からと叱り、思うような枠にはまらないことを嘆
いたりしてはいないだろうか。からだの外側だけ
を意識してはいないだろうか。

子どもたちがからだの内側に気づき、生きて感
じている何かを表現できる手立ての基本は、勝手
に、自由に、遊ばせること。思いつきり話を聞い
てあげること。そしてからだとかからだの触れあい
をすることであろう。

そんな基本を忘れずに、子どもたちが自分をさ
らけだし、自分を愛し、自分に自信が持てるよう
にする場を開いてあげたい。

幼稚園長になって三年の月日が過ぎた。

卒園式後のお別れ会でのこと。本当に園とはお別れという最後の時がやってくると、毎年、園児たちの多くがこらえ切れずに涙を流す。しゃくりあげる子もいる。今年初めて、それは感傷と言つては済まされないことに気が付いた。

子どもたちのからだの内部に、お山も、木も、お砂場も、そして先生も、お友だちも、入り込んでいたのだ。園はまさにからだの一部であり、園という時空間から離れることは身を削られることなのだ。子どもたちは幼稚園という場に自分のまごとのからだを存在させて生きていたのだ。

現代っ子の生活から消失した「遊ぶ時間、遊ぶ空間、遊ぶ仲間」を存分に楽しみ、生の欲求を存分にぶつけたのである。こらえ切れずに涙し、しゃくりあげる姿は、精一杯遊びきって満足した喜びがあつたのだ。

保育とは、宇宙のような神秘をもつ子どもの内側に目を向けること。そして内側と外側の合体、すなわち「生きること」と「表現すること」がからだを接点にして実現するように、今の子どもたちを無意識に束縛しているものを解きほぐし、崩し、壊し、命の塊を納得させることのようにである。

卒園する園児たちの歌声は声とからだで伝える育ちの証し（表現）であり、一人ひとりがからだの奥底から発する声は心をあわせたハーモニーとなつて会場に響き渡つた。

（お茶の水女子大学）

註 齊藤茂男、一九九八、「描線が物語る心の危機」、

『こどもと体育』、光文書院、一〇六号

育てられつつある時代に「育てる」とを学ぶ(7)

— 乳幼児教育における「保育教育」 —

金田 利子

岡村由紀子

はじめに

今回で、この連載を閉じることになります。終わりに当って、(1)で詳しく触れた、国民の普通教育としての「保育教育」とは何かについて振り返っておきます。

「保育教育」とは世代再生産の教育であり、将来親になってもならなくてもすべての子どもに、次世代、ひいては異世代と発展的にかかわろうとする意欲と基礎的な力を育てる教育のことをさします。この力は、自

分以外の他者とかかわる力に集約されますが、他者を理解することは自己を知ることと不可分にかかわることを考えますとき、その力の基礎として、自己信頼感の育成もまた不可欠になります。したがって、「保育教育」で育てたい力の基礎はかわる主体としての自分づくりの教育ともいえます。

今日の家庭科においては、中学校と高等学校にのみ、保育教育が位置づけられています。小学校にも、乳幼児期においても、この教育は必要になるはず

です。高等学校にも中学校にもさまざまな教育課程があり、その中の、自分づくりはそうした学習に取り組み中核になりますが、もちろんそれだけを学んでいればよいわけではありません。そのように捉えるなら、小学校においても乳幼児教育においても、いや乳児教育においても、その関係（諸内容と自分づくりの関係）は同じはずではないでしょうか。

先回はこのような角度から、小学校における保育教育の実践を取り上げました。今回は乳幼児教育においてはどのようなことが「保育教育」に当たるのかについて扱いたいと思います。ここでは、とくに乳幼児教育のなかでも幼児期の教育における「保育教育」について、こうした内容を意識的に取り組んでこられた岡村由紀子氏（あおぞらキンダーガーデン園長）に登場していただきました。（以下は岡村氏の執筆による）。

幼児期の子どもと保育教育

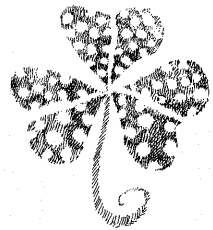
幼児期の子どもたちが「育てられている時代」に育て

ることを学ぶ」ということを考えると、一見イメージしにくいのですが、保育教育の本質を本連載(1)（昨年七月号）の言葉（……自己

信頼感を築き、児童観、発達観、人間観、を乳幼児とかわりつつ自己の育ちを対象化する中で、命の重みを実感を持つて学ぶなら、子ども時代を豊かにするとともに、育てる側になったときの大きな力になるのではないのでしょうか）から捉えるとき、私たちの園で営まれている保育の中で大事にしているものと通じるように思い報告させていただきます。

幼児期は感性の時代であると言われ、他の教育の時期とはちがっています。

“みんなちがってもいいんだよ”ということを感じる生活を作っていくには、子どもと子ども、子どもと大人、大人と大人、それぞれが自分らしく生きていく関係を抜きにはできない時代です。



幼児教育はなんとと言ってもあそびが中心になります
が、幼児期の「保育教育」においても、その力の基礎
は子どもの生活の中心であるあそびの中で育つのでは
ないかと考えています。

自分が丸ごと受け止められ、夢中になってワクワク
ドキドキ遊ぶ中でこそ、子どもは「自分をたいせつに
する」、つまり「自分らしさ」が育っていくのだと思
います。

子どもがあそびの中で主人公になって夢中になっ
ているときは、自信にあふれ、ほんとうにすてきな顔
を見せてくれます。(それはもちろん、一見マイナスと
思われる、悔しい、悲しい、こわい、さみしい感情な
ども含めてです)そして、あそびって一人で遊ぶの
も楽しいけれど、友だちと遊ぶのもっと楽しいとい
う感情を、たっぷり育てたいと願っています。それ
は、子どもたちが大好きな友だちの中でこそ、人間と
して大切な自分らしく生きていく力(自立的自己コン
トロール)も育っていくと思うからです。幼児期の保

育の中で育つ、友だち大好き(大きくいえば、人間大
好き)の心を、ていねいに豊かに育んでいくこと、そ
れこそが幼児期の「保育教育」に当たると考えます。

あそびなかまの中で育つ自分を大切にする力

—四歳児の実践から—

今日は、まなみちゃんの誕生日です。まなみちゃん
が「家にきてほしい」というので、みんなでまなみ
ちゃんの家にでかけました。まなみちゃんの家で少
し遊んだ後、まなみちゃんがパーティーは「草スキーし
て遊びたい」といつていたことを伝えて、まなみち
んの家の裏にある蘆科川の土手で草スキーをすること
にしました。おじいちゃんがダンボールを用意してく
れました(ありがとう)。お昼近かつたけど、さっそ
く思い思いにすべるみんな。そんな中、なんとなくげ
んきがないまゆこちゃんです。ダンボールの上に座っ
て見ているのです。

そのうち、「おながすいたー」の声広がったの

で、土手の下の陽だまりでお昼を取るようにしました。シートを敷いていると、けんご君、ひさし君がやってきて「まゆちゃん、なにかおかしい。どうした? っていつても、何にもいわない」というのです。

そこで土手の上のまゆこちゃんのところへ行くと、ほんとうに元気がなくなつて、ひざを抱え込んで伏せているのです。「どうしたの?」といつても、何を聞いても返事がありません。そこで「じゃあ、お話できるよになつたら言つてね。みんな、おなかすいたというから、先に食べていいかしら?」というと、うなずく「まゆこちゃん。土手の下に下りていき、お昼の支度をしているみんなにそのことを伝えて、さきに「いただきます」をしました。

その後保育者は「お話できるようになつたか聞いてくるね」といつてまゆこちゃんのところへ行き、「もう、お話できる?」と聞くと、かすかにうなずくまゆこちゃん、ひとこと、「一人で食べたい」というのです。保育者が「そうかなあ。じゃあ、ここじゃあ下か

ら見えなくなつて心配だから、もう少しこつちに来て、見えるところで食べてくれる?」という「うん」とうなずくまゆこちゃん。そこでいつしよにシートを敷くのを手伝いながら聞いてみました。

保育者「ねえ、きいてもいいかなあ、ひとつだけ」

まゆこ「うん」

保育者「まゆこちゃんさあ、ダンボールですべる

のこわい?」

まゆこ「うん」

保育者「そうだったんだ。じゃあ、お昼食べたら

抱っこでやる?」

まゆこ「ううん」

保育者「じゃあ、おんぶはどう? こわくない

し、いいよ」

まゆこ「うん、そうする」

(やつと笑顔に)

そこでもう一回

「みんなのところで食べる？」と聞くと「ここでいい」というので、土手の上で「いただきます」をしたまゆこちゃんでした。下に行つて、今話していたことをみんなに伝えました。

けんご「いっしょに、すべるよ！」

だいし「聞いてみる、食べたなら」

あきら君はさつそく靴をはいてまゆこちゃんのところへ。

あきら「いっしょにすべるって！ 肩につかまれ

ば大丈夫だからって。だから（あきら）

いっしょにすべる！」

しんたろう「オレ、まゆこちゃんこわいと言つて

るからいっしょにやるよ」

そして、お昼を食べ終わると、まだ食べている保育者を置いて、まゆこちゃんは、あきら君や、けんご君、しんたろう君の背中にくっついてかわるがわるすべり（まゆこちゃんのとおりっこでした）、とつてもいい顔でやっています。その後は、ずつとるんちゃん

と二人すべりを楽しみました。今では「草スキー、楽しい！」というまゆこちゃんになりました。

一般的には、四歳児は他者が見えはじめ、自己に気づく時代であり（第二の自我の形成期）その心の現われは多様です。すねる、臆病になる、自信がなくなる、今までできたことができなくなるなど、生活やあそびの中で一見わがままとも思える行動が多くなり、家の方々は“なまいきになった”“言うことをきかなくなつた”など子育ても子ども心が見えにくく悩むことが多くなつてくるようです。

こうした、わがままにも似た子ども現われを自己主張として捉え直して保育を進めていくと子どもは、自己を見つめ、仲間の存在に気づき、あそびが楽しくなり自信になっていきます。

こうしたあそびのなかまの中で育つていった子どもたちは、五歳児になると自己の意見を“考えがある”“わたしはこう思う”“いわないとわかんない”“○○ちゃんと同じというのだからいいんだよ”“イヤだけ

じゃあわかんないから訳をいってほしい”など合意をつくる活発な話し合いが見られるようになっていきます(著者らの共著『4歳児の自我形成と保育』ひとなる書房 二〇〇二年 参照)。

相棒活動と保育教育

「あおぞら」では入園すると相棒といつて異年齢(二〜五歳)でグループをつくります(核家族化が進む中で同じ園に集まる大きなきょうだいとして自然に交流することを大切にしています)。

グループづくりは、顔見知り、地域や兄弟関係などを大切にします。“あの子の相棒になりたい”とはじめから楽しみにする年長児もいます(卒園するまで同じグループ)。

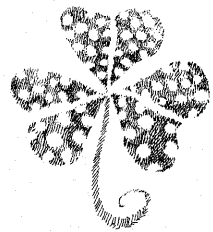
着替えの手伝いや、週一回一緒に食事をし、困ったときのおにいさん、おねえさん役でおしっこに連れていったり、散歩に連れていったり様々です。

相棒と一緒にいたい! と入園した子が五歳児と散

歩にいたり、食事も一緒にする姿も見うけられます。この活動は入園した子どもたちが園に居場所を作っていくプロセスでは大きな力となっているようです。

父母からのおたよりでも、“相棒さんの名前がよくできます”“だいすき、といっています”などよく聞かれます。また、大きい子どもたちも小さい子が泣く姿を見て“おうちへかえりたいんだね”“もうすぐだよ”と声をかけあそびに誘ったりルールのわからない姿を見て“にじさん(三歳児)はお口で言えない(言葉でなくすぐたいてしまう)けどしようがないなあ”という四、五歳児。自分たちならもう言えるという喜びとそれを自覚する子どもたちの姿が見られます。

小さくつても自分を大切にしながらも、違った発達の子どもたちとかかわる中で自分を育てている姿は多



く見られて卒園をむかえる頃は、大きい子にそこがれる姿、小さい子を優しく思う姿がいろいろなところで見られるようになっていきます。

これは、まさしく幼児期において広い意味では異世代につながる、異年齢、異発達の子どもとかかわる力を大きい子にも小さい子にもはぐくむ活動に当ります。

子育ての中で自分が育つ大人たち

保育の様子を日常おたよりにして伝えていきます。

それは、ありのままの子どもの姿であり、その中で子どもを知ってもらい「子どもは凄い」「子育てって楽しいなあ」と感じ、子育てを応援していきたいと願っているからです。

以下は卒園を前にいただいたおたよりの抜粋ですが、いつだって、どんな時だって大人も子どもも育ちあえることの素晴らしさ、そして児童虐待などが増える中での連鎖が絶ち切れる何かの力になればと益々、

園自体が親と共に「育てている時代に育つことを学ぶ」役割も大きいのでは、と思っています。

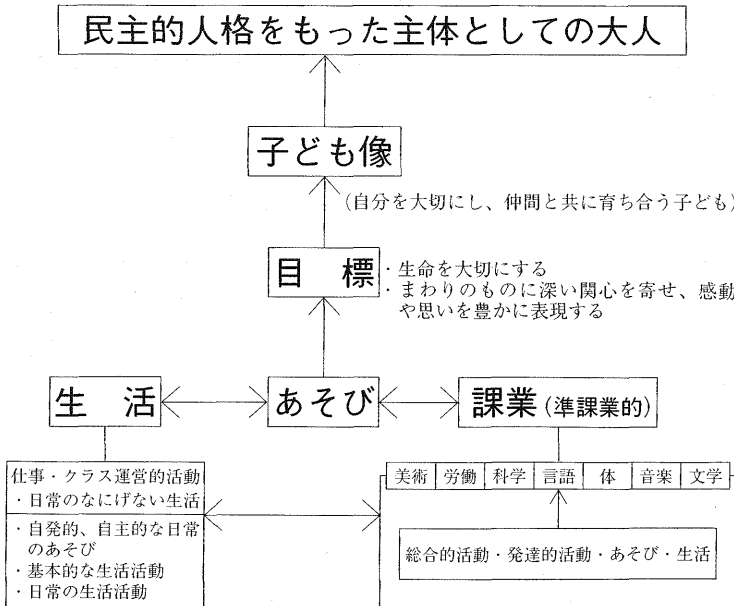
* 今の世の中不安がいっぱいですが、子どもを通してまだまだ人生すてたもんじゃあない、と希望をもっています。

* なるべく問題を起こさないようにとか、自分の弱さ、かつこ悪いとこ出さないようにと初期の頃の連絡帳はあまりさしさわりのないこと書いていたような気がします。ーからかな？ 岡村先生だから甘えてしまいかけて「信頼する」ことを学び、信頼できる人々に出あえたことに感謝しています。子どもたちそれぞれの三年間も、とつても素敵だったけれど私も、とても貴重な六年間を過ごさせてもらいました。

* 私（元保育者）も、先生たち一人一人、みんな人間がステキなんだなって思います。やっぱり意地悪な人は、いくら仕事だからといっても保育中もう一人の

自分を出し、本当の自分をかくしても絶対人間性は出てしまいます。でも「あおぞら」は、もう一人のウソの自分を出す必要もなく、先生たちもありのままの姿で保育してくれて、それがまたステキなので子どもたち、親たちがつい輝きたくなってしまっただなっと思っていました。

* 「あおぞら」と出会えたこと、岡村先生に出会えたこと、そして子どもを生めたこと（子どもができない頃、三年半でしたが新婚でいちばん辛い時期でもありました）、いい出会いのおかげで私の生活も楽しくて仕方ない毎日。おかあさんたちも本当にいい人たちばかりで子どもを生めたおかげでかけがえない友人がいっぱいできました。「あおぞら」に入っていることばかりでした。私もこの五年でずいぶん成長したと思います。いろんなこと勉強できましたし、吸収できました。



▲図1 あおぞらの保育 『4歳児の自我形成と保育』 p.32

親の私もとっても充実していました。

まとめにかえて

幼児期の活動は、いろいろな要素が含まれていて、一つの側面で見えていくのはとても難しいと思っと思っています。こんな子どもになってほしい（子ども像）と願うことが、日常のあそびや生活の中で具体的に結びつくことでこそ、初めて、保育が見えてくるように思いますが、自分らしさとは、自分が好きになる心（自己肯定感）、自分に自信がもてる心だと思っのです。それは園に来るのが楽しくって、友だち大好きの人に支えられて、どんな自分も出せることなくしては生まれないことだと思っいます。ふざける姿も、甘える姿も、元気がない姿も、一見大人が「困ったなあ」と思えるような姿も、みんな、みんなそこが安心できるからこそ姿だと思っのです。そんな心子どもたち同士が共感しあって、あそびや生活する中で、わかる力、できる力、感じる力も育ち、人間らしく生きる力の感性的土

台が育つのではないかと思っいます。

そして先に見たように、子どもたちのこうした姿に接する中で、大人たちもまた、「育てている時代に育つことを学び」、新たな自分づくりの中で人間として大きく発達していきます。（以上岡村）

おわりに

岡村さんの実践から、右ページの図のように、幼児教育の中にも、さまざまな保育内容の中を貫く異世代と発展的にかかわる力の育成につながる自分づくりの基礎となる教育（＝保育教育）が位置づいてることがわかります。

金田（静岡大学）

岡村（あおぞらキンダーガーデン）

ピエール・ブルデューの『実践感覚』を読む

(1)ブルデュー社会学の方法―「序文」を読む―

安田 尚

ピエール・ブルデュー（一九三〇年～二〇〇二年）

（註1）は、現代社会学における巨人と言ってよいであろう。一言でいって、ブルデューは徹底的に批判的である。その意味でブルデューこそは、最もフランス的な知性、つまり「批判精神」^{エスプリ}の人格化と言えるであろう。しかしその評価と影響はフランス一国にとどまらず、今やその社会学は国際的なものとなっている。

その著書は三〇冊、論文は三四〇本をこえている（註2）。また加藤晴久氏によれば、ブルデューは世界でも多く引用されている社会学者である（註3）。

さらにその影響は社会学だけでなく、国際政治や文学の世界にまで及んでいる。また反グローバリゼーションの旗手であるブルデューの活躍は、常にフランスのジャーナリズムを賑わせている。小生も機会を得

て参加した氏のゼミナールには、欧米諸国からだけでなく、日本、韓国などのアジア諸国や遠く南米ブラジルなどからも若き研究者たちが馳せ参じていた。さらにブルデューは、ドイツでコレージュ・ドゥ・フランスの出張講義をおこなったり、またシカゴ大学のグループとのセミナーを開催するなど、国際的な学問的交流を通してその影響力を益々高めている。ブルデュー社会学に共感する各国の研究者たちは、教育学や文化論、文学、言語学、民族学、階級論、ジェンダー論などの分野で着実に理論的・実証的な研究成果を積み上げつつある。

さて、我が国においてはどうかであろうか。五回に及ぶ来日にもかかわらず筆者の見るところでは、必ずしもその学問的影響力は大きいとは言えない。いつとき教育社会学の分野においてその影響が見受けられた（教育と文化資本と社会階層の関連を実証的に研究）ものの、肝心のブルデュー社会学の方法が我が国の社

会学者に受容され、研究に生かされているとは言いがたい状況である。その原因の一端は、ブルデュー社会学の難解さ、とりわけその表現方法にあると言えよう。もつとも、ブルデュー自身に言わせれば、その難解さには理由がある。それは彼が意識的にとった表現方法なのである。真に新しい思想を語ろうとする時、手垢のついた常識的表現は障害となる。また、「明晰さ」は、「常識の証し」や「狂信の強さ」の別の表現でしかないとも言っている。つまり、「明晰さ」は、社会現象や人間心理の複雑さを削ぎ落としてしまう危険があるのだ。

さらに重要なのは、平易な日常語を使用することに



よって、それが隠し持っている「特定の社会哲学」が持ち込まれることである。それを意識的に避けようとした結果だと言うのである（註4）。さらには、翻訳の問題もあるだろう。すでにブルデューの著書の多くは、翻訳されている。しかし、翻訳者たちの努力にもかかわらず、それが原文の難しさ（複雑に入り組んだ長大な文章、独特の新造語や専門用語の多用など）をさらに強める結果となっているのではなからうか。筆者の経験からしても（註5）、ブルデューの書く、幾重にも積み重ねられた複文構造を正確で平明な日本語に写すのは、至難の業である。

そこで今回編集部から与えられた六回の連載を、ブルデュー社会学の平易な解説とくにその方法と基本概念を中心に―を試みる機会としたい。テキストとして用いるのは、『実践感覚―』（みすず書房、一九八八年）（註6）であるが、訳語と訳文は必ずしも同じではないことをお断りしておきたい。今回は、本書に付

された長大な「序文」を中心に読んでみることにしたい。

「認識条件」の自覚

序文の冒頭、ブルデューは次のように述べている。「社会科学の場合、認識の進歩は、認識条件の認識における進歩を前提にしている」（一―二頁）。つまり、社会科学の場合、その対象に対する認識を深め、その真理に接近するためには、研究者自らの認識条件をつねに客観化、対象化する必要があると言っているのである。我々は対象の中に何を見ているのだろうか、何を見落としているのだろうか、何が我々の眼を曇らせているのだろうか。

こうした問を自らに突きつけると言うことは、研究者の認識条件、つまり自らが身を置いているその国の学界状況、個別の研究領域の学界における地位、^{ポジション}学閥、研究機関の地位など、いわゆる知識社会的条件

と、その研究領域固有の政治的・倫理的構え、理論的状況や技術的条件（問題設定、概念、方法、技術など）を検討することである。さらに重要なのは、その学問が前提としている認識論的前提（客観主義、主観主義など）を自覚することである。

ブルデューはこの序文において、自らの研究の歩み、とりわけその認識条件を反省的に回顧している。

戦後フランスの思想界を支配した二大潮流は、クロード・レヴィ・ストロース（一九〇八〜）とジャン・ポール・サルトル（一九〇五〜一九八〇）であった。

「この時期（一九六〇年代）に社会科学を志そうとしていた多くの人々は、理論的志向と実践的志向、科学的使命と倫理的・政治的使命……を両立させようとする」（二二頁）期待をもっていたと述べている。これはブルデュー自身のことでもある。理論と実践、科学性と倫理性の統一を社会科学に求めたのである。

しかし、「構造主義」的人類学の代表者レヴィ・ス

トロースと主体性の復権を掲げアンガージュマン（知識人の社会参加、政治参加）する「実存主義者」サルトルとの対立も、こうした課題に貢献することはなかった。つまりブルデューは、この両者に何がしか飽き足らないものを感じていたのであり、この両者の積極面を継承しながら統一していく過程は本書の第二章で述べられている。

その後ブルデューは、一九五六年〜五八年、独立戦争最中のアルジェリアで一兵卒として兵役（一年半）に就くことになる。そして、アルジェリアの独立を学問的に支援する立場から、「アルジェリア社会の科学的分析」を開始する。これが当時のブルデューにとって、実践的志向と科学的志向を両立させる方法だったのである。こうした学問に対する態度は、終生変わらなかったと言える。そのとき、研究の導きの糸となつたのが、レヴィ・ストロースのいわゆる「構造主義」的人類学であった。つまり、ブルデューが科学的

ヒューマニズムの「模範的成就」と当時高く評価していたレヴィ・ストロースの「神話研究」に触発されながら、一九五八年以降「カビル族の儀礼研究」（北アフリカ・アルジェの東方地域の民族）に没頭することになる。しかし当時の多くの儀礼研究は、「^{エスノセントリズム}自民族中心主義」（文明と未開の対置、文化的進化論、人種差別的輕蔑）の病にとりつかれていた。ブルデューはこれを脱すべく、「構造主義」を手掛かりに研究を進めることになる。

儀礼・神話研究（「構造主義」）から

「関係主義的思考様式」へ

「構造主義をしばらくのあいだとりまいていた哲学的注釈は、おそらく構造主義の本質的な新しさをなすと思われることを忘れてしまった。」その新しさとは、社会科学のなかに構造論的方法的態度（*method*）、あるいはもつと端的に言えば関係主義思考様式を導入し

たことであった」（六頁）。つまり、ブルデューは「構造主義」の真の新しさを「関係主義的思考様式」にあるとしているのだ。

それは次のように定義される。「関係主義的思考様式とは、実体主義的思考様式と手を切り、ひとつのシステムの中で、ある要素を他の要素に結びつける諸関係によって、また各要素がその意味と機能をひきだす諸関係によってすべての要素を性格づけようとするものである」（六頁）。つまり、システムを構成する要素は、その意味や機能を要素間の関係から引き出すのである。これに対して実体主義は、各要素の意味や機能は、その要素に内在しているとするものである。

しかし、こうした方法的態度は数学や物理学の分野でさえ容易には認められなかった。ましてや社会科学におけるその適用は、一層困難なものであった（おそらく、今日でもそれは変わらない）。だから、この「関係主義的思考様式」を言語、神話、宗教、芸術と

いった象徴体系にまで適用したことは、偉大な前進であった。その結果、「歴史的事実を理解可能な関係の体系として扱えるようになったのである」(七頁)。またブルデュー自身の「構造主義に対する唯一の貢献」(二三五頁)は、この関係主義的思考様式を社会科学の分野に適用したことにあると自負している。これに對して、従来の神話や儀礼の分析において採られてきた方法は、その部分や個々の語彙に着目して、そのシニフィアン(意味を運ぶもの)とシニフィエ(意味内容)を直接、一対一で対応させて(例えば、耕作と性行為を対応させるような)その意味と機能を解釈しようとするものであった。

つまり、各要素をシステム全体の中に位置づけ、各要素の「関係的価値」(七頁)を決定しようとするものではなかったのである。そうした誤りは、「構造主義」の祖と見なされているソシュールの教えを忘れることである。すなわち、「システムを構成している」

各特性は、他の特性が意味表出ししないものだけを意味表出すること、また各特性はそれ自体では非決定(部分的に)であるから、その完全な決定を他の特性の全体との関係からのみ受けとること、つまりひとつの差異体系のなかの差異としてのみ決定される、という事実を忘れることである」(二二頁)。つまり、神話や儀礼のそれぞれの要素の意味と機能は、神話体系や儀礼全体の中でのみ決定されるのであって、バラバラに取り出して研究者の直感によって意味付与されてはならないと言っているのである。



「実践の論理」

Ⅱ 「身体化された分類図式」の発見

ブルデューはこうして確立した方法にもとづいて、カビル族の神話体系と儀礼全体を千五百枚のパンチ・カードに記録し、分析をしている。彼は「農業歴」「結婚」「織物」にくわえ、従来「無視されてきた領域」である「時間の構造と方向（一年の分割、一日の分割、生活時間の分割）、空間構造と方向（家の内部空間の構造と方角）、子供の遊びと身体運動など」（一五頁）を分析の対象とする。

その結果、そこには「対立関係のネットワーク」のあることが明らかとなる。つまり、「湿と乾、低と高、冷と熱、左と右、西と東、北と南、夜と昼が対立するように、秋と春、冬と夏は対立する。…」（一四頁）。それは同時に「等価関係」（同じものと見なされる）でもある。すなわち、右の例でいえば、上側の

「湿Ⅱ低Ⅱ冷Ⅱ左Ⅱ西Ⅱ北Ⅱ夜Ⅱ秋Ⅱ冬」という等式が成立する（もちろん、下側の等式も）。さて問題は、この「相関関係」を成立させる「媒介項」（ヴィトゲンシュタイン）を何処に求めるかである。ブルデューは、それを実践の領域、すなわち「身体運動」の中に発見する。こうしてハビトゥス概念が、確立されることになる。つまり、「無意識的であると同時に体系的な仕方、実践を方向づけることのできる組織化の原理を、身体化された諸性向ディスポジションの側、さらに言えば身体図式の側に探さねばならなかった」。それは、ブルデューにとつて驚愕すべき発見であった。

「家の内部空間から外部空間へと移行させる変換規則は、半回転（一八〇度の回転、裏返し）」という身体運動に帰着しうる、という事実には驚いたものであった（一六頁）。つまりカビル族の場合、家の内部の方角は、外部の方角と正反対になっているのだ。戸を開け、閉める時、人は「半回転」する。この身体運動に

「媒介」されて家の内部空間の方角は、外部空間のそれと逆になる（註7）。ここに「身・体・図・式」であるハ・ビ・ト・ウ・ス・概・念のアイデアが生まれたのである。

さらにブルデューは、カピル族の神話や儀礼の中に「対立と等価」のネットワークを発見すべく、「一覽図式」の作成に取りくむことになる。「農業儀礼」「料理」「女性の活動」「生活のサイクル」「一日の区切り」などについて「循環図式」を作ったのである。そして、ブルデューはこの幾つかの「循環図式」を一つの「循環図式」に統一しようとするのだが、成功しなかった。つまり、「構造主義」の方法に従って何らかの統一された説明原理（「死と再生のサイクル」と言った）を求めたのだが、「事実の全体を全面的に首尾一貫して説明する」（二八頁）ことはできなかった。実はこの失敗こそが「実践の論理」の発見につながるのだ。客観化の道具である「系譜図」「図」「一覽図式」などが、「実践の論理」を破壊してしまうことに

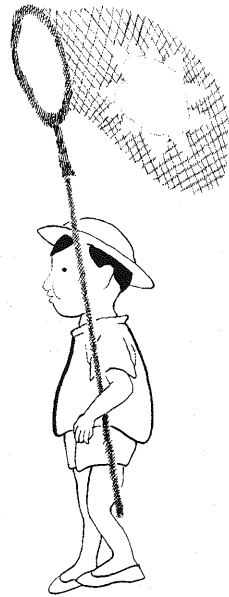
気づいたのである。それは「構造主義的客観主義」の限界であった。複数の「対立関係と等価関係のネットワーク」を説明しうる統一原理が「実践の論理」などではなく、このネットワーク自体が「実践の論理」だったのである。すなわち「身・体」図式とこの図式が一目瞭然にしてくれるあらゆる対立、等価、類似は、それが在るがままに受けとられる限りにおいてのみ価値（意味）があること、すなわちそれらは観察される事実の多くを最も首尾一貫して、最も経済的に説明する論理的モデルである」（二九頁）。つまり、対立、等価、類似といった身体化された分類図式こそが、「実践の論理的モデル」だったのである。した



がって、これ以上の行為モデルや行為の原理を
想定する必要はないこと、またそれ以上は遡及
不能だということである。

しかしこの「実践の論理的モデル」は、「実
践の現実的原理」ではない。なぜなら、「実践
は、実践の中で表出される論理の支配を含まな
い―すなわち排除する―」（一九頁）からである。要

するに、「実践の論理的モデル」は①暗黙の論理（＝
「前論理的論理」）であること、だから②意識され
とその効果を發揮しない論理であること。それは、対
象化されることのない論理である。例えば、母語は身
体化された言語であって、それを話すたびに文法を意
識したりはしないであろう。ブルデュー自身は、他の
ところで「歩くためにはステップの論理に従わなけれ
ばならないとなったら、もう歩くことなどできなくな
るのは明らかです」と述べている（註8）。さらに、
実践の論理を厳密で意識的な行為モデルと考えると、



現実の実践がもっているある種のいい加減さが、見失
われてしまうことになる。つまり、「完全に意識的な
生成規則が、実践を生み出す」としてしまうと、「実
践に固有なものとして特徴づけられるもの」＝「不確
実性やぼやけ」（二〇頁）が見失われることになる。
人間が従っている実践の論理は、「恒常的で意識的な
規則」ではなく、「不透明で、状況次第で変わらざる
を得ない、…常に部分的な視点である実践図式」（二
一頁）なのである。

「婚姻研究」(「観察者と観察対象の関係」)

から「戦略」概念の発見へ

さて次いで、「観察者と観察対象の関係」が問題にされる。両者の間にある距離は、決して、「魔術によって廃棄されるものではなく、この客観的距離を客観化しなければならない」(二四頁)とブルデューは主張する。

そして「理論^{テオリー}とは、この言葉の語るように〔ギリシア語のテオリーは、「観察する」を意味する〕、行為が演じられる舞台の外部に位置する視点からの眺め」(二四頁)である。つまり、元来「理論」とは外部からの眺めなのである。この「観察者と観察対象との関係」は、我々が常に自覚しなければならない「認識条件」のひとつである。我々は、大人と子ども、先生と生徒、支配者と被支配者といった関係の下で、この「距離」を常に自覚せざるを得ないであろう。我々は

この距離をなくすことはできないが、それを客観化し、その「実践的生活様式に精通すること」(二五頁)はできる、とブルデューは指摘する。だから、直感にたよって一挙に対象との「距離」を縮めるとか、「心的参入」「心的再生産」(ディルタイ)や「志向的変容」「他者への志向的転置」(フッサール)といったことは、一種の自己欺瞞である。

ブルデューの場合、研究の方向はこうした安易な「距離」の廃棄にあつたのではなく、この「距離」を自覚的な方法として確立することにあつた。つまり「対象との関係を客観化する作業の科学的成果が特に明確になつたのは、私が婚姻研究をしたときであつた」(二五頁)。レイヴィーストローズが注目した「平行イトコ婚」〔父母それぞれの同性のキョウダイ、つまり父の男のキョウダイ、母の女のキョウダイの子どもとの結婚〕を調査した所、実はそれは極く稀なケース(三〇四パーセント)でしかなく、この婚姻形態は

「規範」や「規則」の遵守によるものではなく、「戦略」（『物質的・象徴的利益の極大化』）として選択されたものであったことが明らかとなる。さらに、ブルデューの故郷ペアルンにおける調査でも、婚姻や親族関係は一つの「戦略」であることが明らかとなった。つまり、人間の行為を支配しているのは「規範」や「規則」ではなく、一定の方向（利益の極大化）をめざす「戦略」なのである。

序文の末尾では、社会学の究極的な任務は「〔社会的〕決定の意識化による他にないのだが、主体という何ものかの構築——さもなければ、世界の諸力の為すが俣にされることになるのだが——に貢献する一つの手段、おそらく唯一の手段を提供することにある」と述べられている。つまり、社会学の究極的な実践的・倫理的使命は、「決定」 Ⅱ 「法則」の「意識化」 Ⅱ 「認識」による「主体性」の復権にあるというのである。つまり、「社会法則」の認識による「主体性」の復権

が主張されているのだ。それを認識できなければ、我々は「世界の諸力」に身を任す無力な存在に止まると言うのだ。ブルデューにとってこれこそが、社会学に期待した倫理的使命だったのである（註9）。

（上越教育大学）

註

1 本稿執筆中の一月二十三日（水）、筆者はブルデューがパリにてガンで亡くなったとの報に接した。多くのメディアは、真に偉大なこの社会学者の死を大きく報じ、その業績を讃えている。その一端を示しておこう。シラク大統領：「フランスは最も才能に恵まれ、世界で最も有名な知識人の一人を失った。〔ブルデュー氏は〕戦闘的な思想家として、又思考の戦士として在りつづけるであろう。…」。ジョスバン首相：「ブルデュー氏は」現代社会学の師であり、我が国の知的生活の偉大な人物であった。彼はその著

作によって、資本主義社会の鋭利な批判を行う思想潮流のリーダーとなった。」(ヌーベル・オプセルバトゥール・インターネット版、二〇〇二年一月二四日付)。

2 Derek Robbins, *Pierre Bourdieu: Master of Social Thought*, vol. 1, Sage Publications, 2000, p. VII.

3 ブルデューの五度目の来日(二〇〇〇年十月三日)に際して開催された講演『新しい社会運動―ネオ・リベラリズムと新しい支配形態―』における加藤氏の講演者紹介。

4 この間の事情は、「問題の社会学者」(ブルデュー『社会学の社会学』田原・安田他訳、藤原書店、一九九二年、四七―八四頁)を参照されたい。

5 ブルデュー『教師と学生のコミュニケーション』安田尚訳、藤原書店、一九九九年。

6 ピエール・ブルデュー『実践感覚1』今村仁司・港道隆、みすず書房、一九八八年。(Pierre Bourdieu, *Le Sens pratique*, Les Éditions de Minuit, 1980.)

7 詳細は、『実践感覚2』の二三〇頁を参照されたい。

8 ブルデュー『構造と実践』(藤原書店、一九八八年) 二二八―二二九頁。

9 詳しくは、ブルデュー『社会学の社会学』五六―六〇頁を参照されたい。

移行対象と児童文学Ⅱ

井原 成男

移行対象というコトバを最初に使いはじめたのは、イギリスの児童分析医であるウイニコットという人で、一九五三年に書いた「移行対象と移行現象」という論文からです。彼はまた、小児科医でした。彼は、幼児が肌身離さず持ち歩くもので、それがないと、ひどく不安になる、ブランケット（日本ではむしろタオルケットが多いのですが）そういう毛布だとか、ぬい

ぐるみ、人形などの無生物を移行対象と呼びました。児童文学の中には、この移行対象がたくさん登場します。ここではその中から最もポピュラーな三つの物語をとり上げます。最初は「ジェインの毛布」で、一次的移行対象の好例です。二番目は、おなじみ「くまのプーさん」。これは二次的移行対象の例です。児童文学の中に登場する頻度が最も多いのも、このぬいぐ

るみたちです。最後の三番目の物語は「ジェシカ」です。これは空想のお友達の登場する物語です。

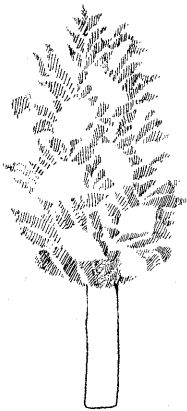
「ジェインの毛布」については、前号でお話ししましたので、ここでは、「くまのプーさん」のお話の続きから始めます。

「くまのプーさん」は、作者であるミルンの息子、クリストファー・ロビンがティ・ベアと遊んでいる様子を見て、「クマのプーさん」の物語を空想していったこと、クリストファー・ロビンは、乳母（ナニー）にとってもなついていて、夏、海水浴に出かける時も、ナニーが行かないのなら、行きたくないと言うぐらい頼っていて、自伝の中で「私は、どこまでもナニーの子で、九歳までそうだった」と書くぐらいでした。この人は、しかし、彼が九歳の時、結婚してミルン家を去ります。この年ロビンは寄宿舎に入るので、ロビン自身、ナニーは母のように大事で何でもしてくれる人であった、そして、クマのぬいぐるみは、ナニーの

代わりだったといっている。前号では、そんなお話をしました。

ところで、クマのプーさんの物語世界の中で展開されるテーマはどんなものでしょうか。

この世界ではみんなとても親切です。とっても根暗のイーヨーなども、ちゃんとプレゼントをもらえる。誰も切り捨てられない、そんな母性的な世界なんですね。プーさんの中で私が最も好きなのは、はねつかえりのトララーです。いつもハネつかえっている、いたずらトラです。ところが、このトララーは最初から元気だったわけではない。このトララーにはお母さんがいな



いんです（これはまるで、現実のロビン自身に似ています）。このトララーが何を食べるのか？

プーたちは一生けんめい探してあげます。トララーが何を食べるのか、いろいろ試しまわり、ハチミツもドングリもアザミもだめだということがわかります。結局、トララーが食べられるのは、カンガのこの子ども（赤ん坊）のルーが食べる麦芽エキスでした。トララーは、大きそうに見えたけれど、実はまだ赤ちゃんだったというところが、とても面白いところだと思えます。私たち臨床家は、心の傷ついた子どもをいやすために、その子を一旦、赤ちゃん返りさせます。そうすることによって、その子はまた力を得ることができるのです。さて、このようにして、トララーはカンガのこの養子になります。実子のルーと一緒に手弁当を持ってピクニックに出かけるトララーはどんなに幸せだったことでしょう。

ある日、プーたちが橋のところで遊んでいると、

イーヨーが川を流れてきます。実はこれはトララーが、川辺で草を食べているイーヨーをつきとばしたからなんです。こんなにもトララーは元気になった。まさにどうしようもない。けれど憎めない、はねつかえりものです。このトララーと同じように、現実のクリストファー・ロビンもプーの世界の中で成長し、自立していったのだと思います。

やがてロビンは九歳になり、寄宿舎に入る（子ども時代に別れを告げる）ために、移行対象であるプーとお別れします。二人が別れ、そして百年たってもここに来たらいっつも会えるという固い約束をした場所は、ギャレオン凹地です。ここところは感動的に次のように書かれています。

「そこで二人はでかけました。ふたりのいったさきがどこであろうと、またその途中にどんなことがおころうと、あの森の魔法の場所には、ひとりの少年とその

子のクマがいつしよにあそんでいることでしょうか。
……プーぼくのことと忘れないって約束しておくれ、ぼくが百歳になっても！」

決して切れることのないプーとロビン、なんと幸せなことでしょう。

このギャレオン凹地というのは一体どこにあるのでしょうか。

それはその後のプーの運命によって明らかです。プーはアメリカ旅行にでかけます。クマのプーさんの物語があまりにも有名になり、このぬいぐるみを目みたいというアメリカの少年、少女の熱望に応えたのです（まるで、ビートルズのアメリカ公演みたいにです）。このさい、ミルンが出した条件はぬいぐるみのプーがいくら汚れても決して洗わないというものでした（移行対象は洗うことで、匂いという感覚運動的な次元の記憶を喪失してしまうからです。またそれは、

ウイニコットのいう「存在が連続しているという感覚」を破壊する行為です。プーは今でもアメリカのダットン社の陳列欄の中にいるそうです。プーのぬいぐるみに会いたくないかというインタビューにこたえて、今や大人になったロビンは、こういつています。「平気です。愛情はいつも自分の心の中にあります」と。私たちは、ある対象との愛情をイメージとして内面化できてはじめて、ぬいぐるみの世界から旅立つていけるのだと思うのです。この内面化された場所がまさにギャレオン凹地なのです。

このようにみてきますと、クマのプーさんは、ロビ



ンという少年が、実際のテディ・ベアを使って、プーという物語（「イメージ世界」の中で、プーとの二人の世界を作りあげてそこからぬけだしていく。まさにこれはぬいぐるみとその運命を、子どもの内面からとらえた物語です。

空想のお友達「ジェシカ」と移行対象

空想のお友達（イマージナリイ・コンパニオン）は欧米ではかなりポピュラーなコンセプトですが、日本ではまだあまりなじみがありません。私が初めてこの言葉を知ったのは、フライバーグの「魔術の年齢」にでてきた「空想の虎」を飼っている女の子の話からです。それはジアンという二歳八か月の子の持っている、空想上の虎で、名前を「笑い虎」といいます。この虎は、いくらジアンに叱られても、ただ笑っている

だけ、決しておどしたり噛んだり吠えたりしない虎です。そしてこの虎は、ジアンが三歳を少し過ぎた頃いなくなりす。フライバーグは、そのするどい感性で、この空想上の虎が、ジアンの心の健康のためには必要なものであり、健康なものであると述べています。

ところで、この「ジェシカ」という題の絵本は、ケビン・ヘンクスというまだ二十九歳という若手のアメリカ（ウイスコンシン州）生れの作家によるものです。ストーリーはとても単純ですが、絵本のもつ視覚的な効果も手伝って、空想のお友達のもつさまざまな特徴をあますところなく描き出しています。

主人公ルーシイにはベットもないし兄弟もいません。でも彼女にはジェシカという大切な人がいます（これが空想のお友達です）。空想のお友達「ジェシカ」はルーシイといつも一緒です。月に行くときも、遊ぶときも、おばあちゃんの所に行くときも、いつも

一緒だと書いてあります（ジェシカは月へ行くという荒唐無稽な空想遊びにも非難なしで付き合ってくれるし、ルーシイが妹に意見するように教訓をたれる相手役も演じてくれるし、ルーシイ自身がぐずぐずしたいときも、ジェシカがのろくしていると責任転嫁できる相手です）。でも彼女の両親は「ジェシカなんていません」ときっぱりと否定します。このところは絵本一ページ使つて大きな字で書いてあつて、笑わせません。

ルーシイはまるで小さな子の世話をするように、ジェシカに食べさせてあげたり、本を読んであげたり、ブロックの積み方を教えたりします（こんなふうに関手を世話することで自分自身が成長していくのです）。ルーシイが怒っているとき、悲しいとき、嬉しいとき、必ずジェシカも共感して同じようにします。ルーシイはジュースをこぼしてもジェシカのせいにし、ベビーシッターに預けられるのが嫌なときには、

ジェシカがお腹をこわしているからいけないと言いついて、自分の欲求を貫徹します。

夜もジェシカと一緒に眠ります。朝もジェシカと一緒に起きます。こんな場面ばかりみると、いかにもジェシカと一体化しているように見えますが、でもよく読むと「いつもある距離を保つて遊んでいる」と書いてありますから、分身として対象化して付き合っているのです。

ルーシイはジェシカと同じ日に、二人揃つて五歳の誕生日を迎え（空想のお友達は、自分と同じ年か少し下の年齢であることが多いのです）、やがて幼稚園に



上がることになります。ルーシイはジェシカと離れて行きたくないのですが、母親はジェシカをおいていけと命令します。母親の言葉に父親は少しかわいそうになったのかフォローして、「ジェシカを置いていっても、たくさんのいい子たちに会えるし、新しい友達もできるよ」とルーシイをなだめます。

ルーシイは両親に黙って、こつそりとジェシカを連れて登園するという芸当をやつてのけます。このあたりが目に見えないイメージの世界の強みです。いつでも連れ歩けるものなのでから自由です。そして、いつでも秘密に連れ歩けるといふことは、心の中で操作し心の引き出しの中に整理して内面化するのにとても都合だということなのです。

ルーシイは他の大勢の子たちの中に入れられますが、その子たちと簡単にはなじめず、不安で仕方がありません。ですからルーシイは自分のそういう気持ちにジェシカに対象化して写しだし（投影し）、「だい

じょうぶよジェシカ、私がついているからね」といいます。ルーシイはジェシカを慰めるという方法を取つて、実は自分を勇気づけているのです。

幼稚園でルーシイは、ジェシカとハニー・トンネルで遊び、お昼寝し、そしてお絵書きをします。本当はこういうことをしながら、ルーシイは次第にこの幼稚園という新奇な場所になじみ始めているのです。

ここからこの話はフィニッシュに入ります。子どもたちは二人一組になるようにいわれますが、ほかの子たちはみんな、すでに仲よしになった子とペアを組みます。ルーシイは本当は困っているのですが平気を装い、「ジェシカといるからいいや」と無理して突っ張っています。すると一人の見慣れない女の子がルーシイに近づいてきて、「いつしよに組んでもいいかしら」と話しかけるのです。シャイなルーシイはどんなふうにも口をきけばいいのかわからなくてモジモジしていますが、この見慣れぬ子はむしろ積極的に自己紹介

し自分の名前を言うのです。その子は、なんとジェシカという名の子でした。ジェシカは本当にいたのです。ルーシイはごく自然にこの「ジェシカ」と遊び始めたのでした。ルーシイが「ジェシカ」と無二の親友になったことは言うまでもありません。

両親はジェシカなんていないと言っていました。私たちもそれは空想のお友達にすぎないと思ってきました。もしかしたら、ルーシイ自身だってそれは空想にすぎないと心の底では思っていたかも知れません。でも、ジェシカはちゃんとしたのです。おそらく、心中のジェシカは、ルーシイが現実の本当のジェシカとお友達になるまでの繋ぎ役、いわば橋渡しとして機能していたのだと思います。移行対象は、子どもが母親を内面化するためのつなぎとして機能していましたが、空想のお友達はさらに、子どもを母親以外の人（仲間）へつなぐ役割をもっているといえるでしょう。

私の知っているあるある大学生は、自分の空想のお友達

をよく覚えていると言います。三人姉妹の長女である彼女は、お姉さんであるために我慢させられることが多く、そのストレスを「バルカン」という名前の空想のお友達に、全てぶつけていたということです。この「バルカン」はそんな彼女の無理な要求を全て受け止めてくれたのでした。またもう一人の大学生は、自分の理想の姿を全て所有している理想の女の子を、空想のお友達にしていたということです。空想のお友達というのは、こうした極端な「悪」や「善」の役をとることで、その子の衝動をほどよくコントロールしたり、社会から期待される無理な課題を和らげる緩衝帯のような役割をもっているのです。

（お茶の水女子大学）

参考文献

井原成男『ぬいぐるみの心理学』日本小児医事出版社、一九九九

夏野菜の収穫

徳野 雅仁

食べものにまつわる記憶は、いつまでも心の中にとどまるようです。

そのことに気づいたのは、あるとき、初めて口にした食べものに、胸が熱くなるほどの懐かしさを感じました。その懐かしさがなぜなのかわからなかったのですが、のちに、じつは、四、五歳の頃によく食べていたものであることがわかり、味覚はしっかりと体が記憶し思い出させてくれるものだと思つたのでした。とくに、子どもの頃の食べものにまつわる出来事は、生涯心に残ることが多いようです。食は人間形成のためのおそらく最も重要な基本でもあり、つくること、食べることへの愛情によつて生きる喜びを知り、多くを学び、人との出会いや日々の生活におけるちよつとした食べものとの出会いが、よき思い出となることはとてもよくあることです。

野菜畑もまた、私の心の中に鮮やかに焼きついていて夏がくると懐しく思い出されます。七、八歳の頃、友人の家の庭でつくられていたトウモロコシ畑のざわめきや、海水浴に行く途中に出会った甘い香りに包まれたマクワウリ畑。夏休みを過ぎた叔母の家近くで見た陽炎ゆれるスイカ畑などがきのうのことのようによみがえってきます。

七月は夏野菜の収穫シーズンです。どれも穫り遅れないよう瑞々しく、十分に実ったところを収穫しましょう。収穫期がいちどに訪れるため、穫り遅れに気をつけたいのは、トウモロコシ、エダマメ、ジャガイモです。

トウモロコシは、果実の先端から出ている毛がこげ茶色になったら早めに摘みとります。エダマメは、サヤインゲンとはちがつて一株ごとにほぼ同時に莢が充実するため、株元を切つて枝ごと収穫します。ジャガイモの収穫は、高温期に入つて茎葉が枯れるのを合図にシャベルでイモを傷つけないように掘り上げます。

夏野菜の代表といえばトマト、キュウリ、ナスですが、いずれも、それぞれに収穫適期をのがさないようにします。トマトは、十分に赤く熟したものからハサミを使わずに、果実を上にして起こすようにして果梗の節状の部分を折りとります。キュウリは、着果後の生長が早く、朝小さいと思つたものでも夕方には大きくなるため、注意しながら早めに収穫すると味覚もよく草勢を保つて実つきもよくなります。早めに収穫した方が美味なのはナスも同じで、果皮に白い生長帯が見られるものは生長も旺盛で瑞々しく美味であることの証でもあります。収穫は、日中の太陽に当たつているときは避け、朝夕に行うことも新鮮なナスを収穫する大事なポイントです。カボチャは、ツルと果実を結ぶ果梗がコルク状になつてから、スイカは果梗の脇にある巻きヒゲが枯れる頃を目安に行います。野菜畑を通して、限りなく心に残る思い出を子どもと共につくりたいものです。

(イラストレーター イラストも筆者)



昼間のきょうだい 夜のきょうだい

森末 哲朗

年が明けて間もない一月五日、ぼくはバイクで六

甲ケール駅に向かう坂を登っていた。

その日、安藤夫妻の家で、どんぐりの運営委員のメンバーの新年会が開かれることになっていたのだ。阪神・淡路大震災の三年後くらいから始まり、

いまでは半ば恒例行事のように毎年開かれている。ケール駅に近づいた時、ヘルメットの風防に白

いものが貼りついた。

雪だった。

——寒いとおもったら、雪か。そういえば、今年はあまり地球温暖化の声が聞かれないな。寒い冬……。冬らしい冬……。

安藤夫婦の家の中では、温かい料理が待っていてくれた。こんな冷える日には、何はなくとも温かい

だけで十分御馳走だが、二人とも料理上手ときているから、旨さが胃袋に染み入るようだ。

二、三人、都合のつかない人もいたが、会が始まって三十分後くらいには、八人のメンバーが揃っていた。その多くの人たちとは、軽く十年を越える付き合いが続いている。

小さな学童クラブといえども、いざ運営するとなると、お金や人間関係のことでは、それなりに難しいこともあるのだが、そこを工夫しながらやりくりしてきた仲間たちだ。

どんぐりクラブという子どもの園は、必ずしも砂糖菓子で出来た甘いお城ではないことを、このメンバーは知っている。

ハイペースでグラスを空にしていく高こうさんに、ほくは話しかけた。

「アキヒロもなあ、あと三か月でどんぐり卒業や。」

あいつがおらんようになったら、寂しなるわ」

まわりも相槌を打った。

六年生のアキヒロは、身体が大きくて、声も大きくて、いたずらが大好きで、チビたちの面倒見もけっこういい子だ。

一年生のリホはアキヒロと同じマンションに住んでいて、小学生にあがる以前からアキヒロに可愛がってもらっていた。お母さんは専業主婦なので、学童保育の場として必ずしもどんぐりが必要としていたわけではなかったが、アキヒロのいるドングリでリホを大きくしたいと決心されたのだ。こんなことは滅多にあることではない。



入所を正式に申し込まれた日に、誰かが言った。
「あいつ、優秀な勧誘員やなあ！」

リホはいま三年生のミサの妹分になり、二人でいさえずれば何にも要らないというほどに仲睦まじく、毎日を過ごしている。アキヒロが卒業したあと、みんなとうまくやっていくだろう。

それにしても、あんな愉快な子が中学生になった途端に縁が薄くなるのでは、やはり寂しい。

「高さん、あ、あ、の話、実現させたいなあ」

酒をすすって、ほくは言った。

あ、あ、の話とは、高さんの父方の故郷、濟州島への旅のことだ。

朝鮮半島の南にぼっかり浮かんだ濟州島から、高さんの父は祖父と共に日本にやってきた。大阪、神戸を往き来するうち、彼は神戸の長田に根を下ろした。そこで高さんは生まれ育った。つれあいの梁さん

んもまた在日二世で、この二人の間にアキヒロが誕生したわけだ。

在日三世のアキヒロは、このところ、自分が日本人ではないということに、深く関心を寄せるようになった。そんな息子とともに、高さんは濟州島への旅を考えていたようなのだ。

昨年の秋だったろうか、高一のケースの父大西さんと、アキヒロの父高さんと、トシコの父安藤さんとぼくの四人で酒を呑んでいた時に、高さんが抑えた声で言った。

「ぼくねえ、濟州島に行きたい、思ってますわ」

一瞬、三人の男たちは彼の口元に視線を向けた。

「アキヒロも、連れてね」

……皆さんもどうですか、とは言わなかったが、聞いてしまった三人はおそらく同じ想いだっただけに違いない。

——その時は、一緒に行きたい。

新年会で再び「済州島ツアー」の話に花が咲いた。秋に聞いた時にはどこか思いつきのような臭いがしていたことが、こうして大勢の仲間と語っているうちに、それはいつか必ず実現されることのように思えてくるから不思議だ。酒がいくらかぼくたちを饒舌にさせていたのかもしれない。

ニューヨークのテロ事件に話は及び、もし日本と朝鮮半島との間にキナ臭い関係が生じたらというところまで話は発展していった。

理屈っぽい話あまり得意ではない大西さんが何かを言い、ぼくが、それはないやろうとちやちやを入れ、まわりの女性たちが笑う。

その大西さんが、しみじみした口調で言った。

「会社ではねえ、こんな風に、なんもかんもオーブ

ンに喋るいうことはないんですよね」

これにはぼくも素直に首肯いた。

アキヒロという一人の少年のことを語りながら、彼のどんぐりでの日常のみにとどまらず、彼がどこからやってきてどこへ行くかとしているのかというアイデンティティーの問題にまで、話は及んでいるのだから。

どんぐりでの六年間、本当に光り輝いて過ごしてきた少年が、おとなへの階段を昇っていく過程で、どんな逆風に出会うのか、できるものなら出会わないで欲しいと願わずにはいられないが、これからの国際政治がどんな障壁を仕掛けてくるのか誰にも予想はつかない。

でも、アキヒロの卒業を機に、これまでの縁がプツリと切れてしまうのではなく、こんな風に繋がってあれば、また何かが生まれるかもしれない。

濟州島への旅が、アキヒロとぼくたちの第二라운
ドのきっかけになってくれるだろう。

震災離婚

ビールばかりでは腹が張るとばかりに、酒に切り
替えた人、ワインを飲み始めた人、……寒い夜が更
けてゆく。

電話が鳴った。

安藤隆子さんが受話器をとる。しばらくお喋りを
していたようだが、「森末さん、電話よ」と、こち
らにチェンジすることになった。

「だれ？」

「山岡さんよ」

中学三年のシンジの母だった。

「明けて、おめでとうございます」

「ああ、ほんまに、おめでとうございます」

「えっ!？」



「もう、聞いたよ。シンジから」

「そうなんですよ……。もっと早く言わなあかんと
思ってたんですけど……」

シンジの母は、照れ臭そうに笑った。

実は暮れにOB・OGの中高生やその親たちと忘
年会を持ち、その席でシンジが母の再婚の話をして
いたのだ。

ぼくが直接聞いたわけではなかったが、シンジの
隣の席に座っていた大西さんや高さんたちが聞いた
のだ。シンジがまだ小さかった頃、どんぐりで集ま
りがあると、シンジは座り心地の良い膝を探して
は、よくその中に座っていた。実の父はいなくて
も、ある意味ではどんぐりのお父さんたちが、シン

ジの父親がわりをしていたのだ。彼らの懐が深かったこともあるが、シンジが持っている生きる力とでもいふべき独特の人なつっこさが、男たちをおやじがわりに仕立てあげていたのかもしれない。

「あいつなあ、(母親の再婚を)嬉しそうに話したわ」

忘年会がはねて、おとなばかりで二次会をやっていた時に、その話を聞いた。

——そうか。嬉しそうにしとつたか……。

まず、良かったと思つた。

次に、こんなことを思つた。

——あいつも、随分おとなになつたもんや。

まだ十五歳だというのに、母が好きになつた男と一緒にいることを、心から祝福している。えらいやつちゃ。辛い時期をくぐり抜けて、優しさを身につけたんや。

シンジの母は、照れながら言った。

「もう、籍は入れたんです。去年のうちに森末さんに言うとかない思たんですけど、……そうですか、……あの子が言うてましたか、……そやないかとは思てたんですけど、……ごめんなさいね、おそうなつて」

「あいつも、ええ男になりましたね。新しいお父さんが出来ることを、単純に喜んでるんやなしに、自分のお母さんがひとりの女として幸せになることを応援しとんどすね」

「いやあ、そうでしょうか……。そこまで……。たしかに、あの子がねえ『年内に籍を入れた方がええ』いうて、強く言つたんですよ。それで、十二月の末に入籍したんです」

阪神・淡路大震災の年に、シンジの母は離婚した。シンジが小学三年生の時だ。

父のいないシンジは、どんぐりのお父さんたちの存在を、まるで父がわりのように自分にたぐり寄せ

て、少年としての骨格を作っていった。その当時、母親はこんな言葉を洩らした。

「わたしでは、手に負えなくて……。でも、皆さんのおかげでグレもせず、ここまで大きくしてもらいました」

母親思いのシンジは、母が身体を悪くした時などは、「重たいもん、オレが持ったらなあかんねん」と、近くのスーパーまでよく付き添っていた。中学生になって間もない頃のことだ。

「よう、育ったやん」

シンジを知るおとなたちは、彼の成長ぶりを一緒に喜んだ。

どんぐりのバザーなどにもよく顔を出し、朝早くから店出しの手伝いをし、最後の片付けまでしっかりと付き合いきる子だった。

間もなく中学生を終わり、四月からはどんな学校で高校生をしているのか誰にも分からないが、足元

の危うかったガキの時代を多くのおとなたちに支えてもらい、ここまで育ってきたのだ。この先、生きている限りは、つまづきはきつと待っているのだから、何も心配は要らない。あいつなら、きつと切り抜けていくだろう。

酔うほどに話題は広がり、時に亭主の悪口がとび出したり、嫁ハンの不足が嘆かれたり、その度に「よう、言うわ」と笑いとばし、酒がすすむ。

夜更けの道を単車を押して歩きながら、心地良い気分でこんなことを思った。

子どもは「昼間のきょうだい」、おとなは「夜のきょうだい」。

(六甲学童保育所どんぐりクラブ)

おばけとがみなりさま

— 幼いきょうだいと暮らす —

藤津 麻里

「ママ、おばけがいるよ」。長男がそう言い出したのは、二歳をちよつと過ぎた頃だったと思います。私たちが住んでいる3DKのアパートの北側の六畳間は湿気がひどいため、物置となっていて、普段は開かずの間。そこにおばけがいるというのです。

「おばけ」なんて、どこでそんなアイデアを仕入れてきたのかしら？ 日中預けているベビーホームで、そんな話題が出ているのかな。そう思いながら私が襖を開けると、長男は乱雑な部屋の中を指さして「あれがおばけ」と言いました。散らかったものを一つずつ指さしながら「これ？

これ？」と私が聞いてみると、小さな灰色のマットを「うん、それがおばけ」。このマットは、チャイルドシートに新生児を乗せる時に使うものなのですが、我が家では使用する機会がなく、開かずの間にしまいつばなしになっていたのです。

後日、またこの部屋の襖を開けると、後ろから覗きこんだ長男が「あつ、おばけ」とまた指さします。今度は、ハンガーに吊りあつた私のマタニティドレス。うーん、灰色のマットもマタニティドレスも、どちらもテロンとのつべらぼうな形状で、確かにおばけらしく見えないこともないのですが……ほんとうにこれを「おばけ」だと思っているのかな。子どもの言葉は、あまり額面どおりに受け取りすぎると本質を見失ってしまうような気がします。彼にとつては「もの」はそれほど重要ではなくて、普段開けられることのない部屋の中に「おばけがいるつもり」になつて、そ

の気分を楽しんでいたのでしょう。

そのうち、この部屋に住むおばけは、いつからか、長男のトイレトレーニングの仲間ともいえる存在になりました。というのは、この開かずの間はトイレのすぐ横にあるのです。何がきっかけだったのかは定かでないのですが、トイレで長男がおしっこをすませた後、私とこんな会話をするようになったのです。

私（おばけになつて） 「な おくん（長男の呼び名） おしっこできたの？」

長男 「できたよ」

私 「ほくもできたよ。でも、ちよつとぬ

れちゃつたの」

長男 「パンツかえな、おばけ」

私 「うん、かえるね」

長男 「ピポピポパンツにしな」

ピポピポパンツというのは、長男がお気に入り



の、パトカーの絵がついたパンツのことです。私がおばけを演じ、長男がおばけにアドバイスするのがいつものパターン。長男の方から、「おばけ、ここ（便器）に上手におしっこできたんだって」と話を始めることもあります。父親とトイレに行った時と同じようにしているのかと思っていたら、「ママとだけだよ」と夫に言われました。そうか、長男にとっては、「ママとする遊び」だったのか……。もしかしたら子どもの方が、私のごっこ遊びにつきあってくれていたのかな？

それでも、長男もこのおばけをちよつとした心の支えにしている節もあるのです。今日は一日中、なぜかおしっこに行くタイミングが合わず、

何度もおもらしをしてしまいました。夕方にも父親とトイレに行った時に間に合わず、またパンツをぬらし、下半身ハダカで居間に戻ってきました。そして、笑顔で私に寄りかかりながら、「おばけ、パンツとズボンかえたんだって」と言いました。

「おばけも失敗してパンツをかえたんだ」という遊びをすることで、母親の私に甘えたい、そして、自分の失敗も別になんてことないんだ、とちよつぱり気持ちを立て直していたのかもしれない。

寝る前に「かみなりさま」が出るようになった



のも、おそらく長男が二歳になる前後の頃だった
と思います。このかみなりさまは、完全に私たち
親の側から仕掛けたもの。パジャマを着なかつた
り、おなかを出していたり、なかなか寝なかつた
りする長男に「そういうことをしていると、かみ
なりさまがおへそを取りに来る」と話したので
す。「かみなりさまが窓の外から見てるよ！ お
なかをしまつて！ ふとんに入つて！」と、私が
窓の外の様子をうかがつてみせます。夫が、赤ん
坊の次男を抱いてかみなりさまになり、ナマハゲ
よろしく「寝てない子はいねえか！」とドシンド
シン歩いてきます。「キヤー、ママかくれて！」
と長男は私と一緒にふとんをかぶつて大はしゃ
ぎ。クスクス、こわいね、とふとんの中で囁きあ
います。「寝てない子はいないか？ おかしいな
あ。今日は帰るとするか」とかみなりさまは帰つ
ていきます。「パパ！、かみなりさまになつて

え！」と大喜びの長男。寝かせるはずが、かえつ
て興奮させる結果になつたこともありました。

このかみなりさまが出現して間もない時期に、
『ふうじんくんとらいじんくん』（古川タク作
福音館書店 こどものとも年少版）という絵本に
出会いました。俵屋宗達の風神雷神図屏風をモ
チーフにした作品で、風の神様の「ふうじんく
ん」と雷の神様の「らいじんくん」が、空で風を
吹かせ、雷を鳴らしてコンサートをするという内
容です。「ヒュー ボワツ ボロベビリバボ ブ
ハツ」などの擬音の面白さに笑つたり、画面の端
にイタズラ描きのように描かれているサイドス
トリーを喜んだり、何度も読んで親子で楽しみ
ました。

この絵本の裏表紙には、ふうじんくんとらいじ
んくんが、風神雷神図と同じ構図で、屏風の上に
描かれています。長男はそれを見て、「まどか

らじろじろ見てるよ」と言いました。

屏風の絵は、矢羽のような形をした窓からふうじんくんとらいじんくんがのぞいているようにも見えるのです。これもどうやら、「かみなりさまがおへそを取りに来て窓から見ている」という、寝る前の遊びとつながっていたようです。

このかみなりさま、最近ほとんど姿を見せなくなりしました。二歳八か月になった今では、寝る前に父親に絵本を読んでもらい、読み終わったら灯りを消して寝る、ということができるようになってきたのです。次男が二歳くらいになったら、またかみなりさまが必要になるのでしょうか……？ とにかく、一時は毎晩大活躍だったかみなりさまも、しばらく休息に入ったようです。

このおばけとかみなりさまの出現した時期をもっと正確に調べようと思い、とぎれとぎれにつ

けている育児日記を開いてみました。ところが、育児日記には、おばけやかみなりさまについての記録がほとんど何も残っていないのです。

えーっ、ウソでしょう、あんなに何回もやってるのに……と、自分が記録していなかったことを意外に思いました。それだけ、おばけやかみなりさまは、私たちにとって日常的な、ささやかな出来事にすぎなかったのでしょう。ごっこ遊びでもあり、早く寝かせたいという親の思惑の産物でもあり……。子どもたちもいずれ、こんなことには鼻もひっつけなくなるのでしょうか。もうしばらくは、こんな架空の存在に助けられ、ごっこ遊びを楽しみながら、子育てしていくことになりそうです。

(会津若松市在住)

幼稚園で過ごした一年

坂本 衣里

私は、昨年の四月から一年間、お茶の水女子大学附属幼稚園において、非常勤講師として働かせていただいていた。この一年という短い期間で、私とその役割を十分に果たせたとはいえ難いが、個人としては、様々な経験をさせていただき、とても有意義な時間を過ごすことができたと思っている。

最後にこのような形で、この一年を振り返る機会を与えていただいたことにも深く感謝する。

新入園児とともに過ごす一学期

一学期、特に前半は、一対一のかかわりが非常に多かったように思う。たとえば、多くの子どもたちが囲まれていたとしても、それは子ども同士がつながりをもった集団ではなく、それぞれが大人（私）とのかかわりを求めている。

この時期、新入園児は急激な環境の変化に戸惑って

いたし、進級した年中児のなかにも、慣れた幼稚園とはいえ、部屋も変わり、新入園児も加わって新しい雰囲気になったクラスのなかで落ち着かない子がいた。目にいっぱい涙を溜めて過ごす子、何をしたいかわからず、不安げにさまようような子どもの姿が園内のあちらこちらに見られた。そんな時期、忙しい担任にかわる抛り所として私を頼ってくる子どもがいるのは当然のことであった。

年少児のA夫との最初のかかわりについては覚えていない。ただ、私の名前を一番始めにはつきりと呼んだ子であることは確かである。私は、名前が年少の担任と同じことから、自分のことは名字で言うようにしていたのだが（A夫の担任もそう呼んでいた）、彼は、母親に聞いたらしく、入園して一週間もたたないころから、「えりせんせい、えりせんせい。」とさかんに呼びかけるようになり、一緒にいることが多くなった。

B子は、新入園の年中児である。言葉はあまり発しなかったが、いつも園庭への出入り口に立ち、じっと

私を見ているようなところがあつた。近づくと、始めは、担任とは違うらしい私に対して様子をうかがうように一言二言ポツポツしゃべる程度だったが、しばらくすると、時々私について歩くようになった。

C夫は年長児ではあつたが、年少の途中から年中の一月まで海外で生活、二月から再び通い始めたばかりということ、新入園児のような不安定さがみられた。このころは虫さがしに夢中で、よく一緒に行こうと誘われた。

ブロックでカメラを作つて写真をとったり、砂場の道具をもつて小屋のなかに入り、食べ物を作つたりして楽しみたいA夫、何をするでもなく大人に寄り添っていたい、会話を楽しんでいたB子、一緒に虫（あり）さがしをしてほしいC夫など、そのほかにもさまざまに声をかけてくる子どもたちがいた。自分が必要とされていることは素直にうれしかったし、もちろん、楽しくもあつた。しかし、一人一人にはできるだけ丁寧にかかわっていたし、急に無理をして子どもと

子どもをつなげようとするものではないこともわかってきたつもりではあったが、目を重ねるにつれて、こうした個々への対応が続くなかからは、なかなか保育をしているという実感がもてないことに気づくようになった。かといって、フリーとしてもっと動くべき場所があるのではないかと全体に広く動こうとすると、かえって遊びの表面にふれるだけのようになると、かえってしまうこともあり、それもまた保育の実感へはつながらず、結局、時折、私から離れて友だちとの関係を作り始める子どもたちにはっとしたりしながらも、かわらない個別的なかわりの多さのなかで、どこかでこれでいいのかという思いをもち続けていたように思う。

しかし、一年たってみると、このとき私のまわりにいた子どもたちは、大きく変わっていた。正直言って、今回自分の記録を見直すまで、一学期の彼らは私の記憶から姿を消していた。いろいろな面で不安げな姿を目にしていたC夫もすっかり友だちのなかにと

け込み、いい顔をして卒園していった。B子は、クラスの子や全園児が集まるような場面では、時折落ち着かない様子をみせたりするものの、普段の遊びのなかでは、友だちと楽しそうに笑い合う姿を何度も目にするようになった。私の姿をみると必ず名前を呼ぶのだが、傍らには友だちがいることも多く、必ずしも私を必要としているという意味の呼びかけではなくなっていた。A夫は、その性格のかたくなさゆえに、友達と衝突することもしばしばだが、遊びへの意欲は常に溢れているし、多少強引ではあるが、友だちをグイグイとひっぱって活動を展開している。

もちろん、ここまでの変化には、担任の先生の日々のかかわり、子どもたち自身の力によるところが大きいのだが、子どもたちのあの不安定な時期の支えに私も少しでもなれたとしたら、あの戸惑いつつもゆつくり彼らと関わっていた時間も保育としての意味を十分にもっていたと言えるのだろう。

遊びに入り込む二学期

個別的なかわりが多くなりがちだった一学期、特に前半とは対照的に、一学期の終わりから二学期の前半は、年長、年中の遊びにかかわっていくことが多くなる。きっかけは全く別の意図によるものであったが、一時的とはいえ、遊戯室という一つの場にある程度の時間、継続して居続けるようになったことで、私の動き方は大きく変わったと思う。

一つの場所にいることで、その場の連続した流れが見えるのと同時に、他の場の様子を気にしすぎず、一つ一つの遊びにゆっくりかかわることができた。それによって、そこにかかわる子どもたちを少しずつにでも理解するヒントが得られたし、そこでどのような援助をしたらよいかを考えやすくなった。

年長、年中児がほとんどということもあって、遊びも大きく展開し、また友だち同士のぶつかりあいも多

く見られた。

いろいろな形で動いたり、声をかけたりしても、必ずしも場は盛り上がらなかつたり、子ども同士のぶつかりあいに対する接し方にも悩まされ、落ち込むことも多かつたが、子どもにとっても、一緒に生活する保育者にとっても、すぐうまくいくことだけがいいわけではなく、その過程が大事なのだということがわかってくると、気持ちは楽になった。

年少児と過ごす三学期

教育実習、入園検定による休園期間の後から三学期は、ほとんどの時間を年少児と過ごすことになる。



一学期からかわりの多かった年少児ではあったが、担当として位置づけられることによって、さらに子どもたちとの関係も深まり、担任ともより話がしやすくなった。

この時期、子どもたちの動きは、年少児においてもほんとに大きく広がりを見せるようになり、それぞれが別々の活動をして楽しんでいた砂場にも協同した動きが見られるようになる。

二月のある日、D夫が砂場に一人で向かう。二学期にもよく砂場で遊んでいたD夫であったが、ちよつと久しぶりに一緒に砂場に入ってみようと思う。「砂をやわらかくする」という活動から手伝って、やわらかくした砂で山を作ることになる。途中で入ってきたE夫とF夫のうち、F夫のほうはD夫の山を手伝い、「宝物をかくそう」と提案して一緒に砂場の道具を埋めたりするなど、さらに盛り上がっていくかと期待し

たが、E夫のほうがいまひとつのらず、結局F夫を連れ出して行ってしまう。また二人になって続けていると、今度はG夫も手伝いに入ってくるが、ちよつどタイムングが悪く、お弁当の時間がせまっていたこともあり、明日続きをやるということで、へとつておいでくださいの札をさして、終了する。しかし、午後には、その横に、隣のクラスのH夫、I夫などが対抗するように同じような山を作っていたり、J夫、K子を交えて、再びD夫が山作りに没頭していた。

翌日も山作りは続いていた。年少にしてはかなり大きいので、ほかの子どもたちも気になるようで、私は直接は関わらなかつたが、砂場には人が絶えなかつた。いつまで続くか楽しみになる。

その翌日は、年少の担任の一人が出張のため、一日クラス担任を引き受ける日であったが、この日、砂場では大きなさらに大きな動きが見られることになる。

その日もまた、D夫は朝から砂場に向かった。する

と、山に盛る砂を掘っているうちにある発見をする。

砂場の縁の内側に一段の段差をみつけたのである。それから、L夫、M夫とともに、始めはかすかに見えていただけのコンクリートを完全に露にする大工事が始まった。残念ながら、私はその日、担任として他の子の対応に追われることが多く、十分にその活動を見守り続けることはできなかったが、それは、山作り以上に隣のクラスの子どもたちにも影響を与え、隣のクラスでいまひとつ遊びに集中できない様子が見えれば見られていたN夫も、D夫と翌日も続けるといふ約束をかく結ぶほど積極的に参加し、D夫との新しい関係を作り始めるきっかけともなった。

この大工事は、その後数日続いて収束していったが、時折、段差が少し埋められては掘りかえされるといふ繰り返しが続いた。

この活動は、私が見た年少児の活動のなかでは、最も大きい部類に入らと思う。自分とD夫の一つの小

な活動が、クラスを越えて大きな流れとなつて展開していく姿に感動を覚えた。自分が保育者として、子どもものなかに入っている実感がそこにはあった。

卒園式の日、子どもたちの涙でくしゃくしゃになった顔を見て、子どもたちがどんなにかすばらしい時間を過ごしてきたかをあらためて知る。そして、その時間を支える仕事のすばらしさを知る。年少児だった彼らも、やがてそんな顔をして巣立っていくことである。私自身は、どれほどの力にもなっていないことを知りながらも、同じ時期の一部でも共有できたことをほんとうに幸せに思う。

このような幸せな時間をくれた子どもたち、先生方にこころからお礼を言いたい。

(元お茶の水女子大学附属幼稚園)

子どもと環境

田中三保子

食器洗い乾燥機

先日ラジオのスイッチを入れたら、評論家とアナウンサーが今の時代の家事について話をしてるところで、ちょうど食器洗い乾燥機（食洗機）が話題になっていた。今の機種は手洗いより水も洗剤も少なくて済み、家事が格段に楽になるといふ。そこへ、聴取者から疑問が寄せられた。自分も買いたいと思っ

て、食洗機を使うようになると子どもたちが食器を手で洗えなくなってしまうのではないかと心配だということであった。それに対して評論家は、今やどの家庭にも洗濯機があるのが当たり前であるように、食洗機が当たり前の時代がもうすぐやってくるであろうから、心配しなくてもいいのではないかと答えていた。確かに、今はどこにも洗濯機があるし、コインランドリーさえある。食洗機もありふれた家電製品になるか

もしれない。私もあつたらいいなあと思うときがあるし、いろいろな事情で毎日の家事の負担を軽減できればと願う人もたくさんいることと思う。けれども、先の聴取者の疑問ももつともという気もしてくる。

生まれたときから家の中には洗濯機がありそれが動くのを見て育った人たちは、洗濯ということをどうとらえているのだろうか。洗濯物を洗剤と一緒に入れてボタンを押せば機械がしてくれることと思つてはいないだろうか。洗濯機がなくても洗濯することはできないであろうか。試しに、息子に手で洗濯できるか聞いてみた。答えは、小学校の家庭科の時間に洗濯板を使ってやったことがあるからできると思うよということであった。今や洗濯は学校で習うものなのかと、これには苦笑してしまった。考えてみれば、私は今まで息子の見ている前で手で洗濯したことはなかったかもしれない。当たり前といえば言えるのであるが、現実を突きつけられた思いがした。

家事を担う者にとつて、日に三度ずつ繰り返し返される

食器洗いはかなりの負担である。食洗機は遠からずかなりの家庭に普及していくであろう。そうになると、笑いごとではなく、習わなければ食器を洗えない人が出てこないとは限らない。食洗機のないところではどうするのだろうか。たかが汚れた食器をきれいにすればいいだけのことである。水と洗剤があればどうにでもなる、かもしれない。でも、ひとつひとつの食器や環境への配慮などは生まれてこないのではないだろうか。

ずいぶん前になるが、洗濯機が壊れたという人の投書が新聞に載ったことがある。仕方なく手でじゃぶじゃぶ洗濯してみたら、洗濯物がきれいになるのが嬉しくて、母親の洗濯していた姿を思い出したりもして、思いのほか充実感が味わえた。家族全員のものを洗うのは大変だけれど、もうしばらくこの生活を続けてみようかと思つているといった趣旨だったと記憶している。かつては人の手に頼るほかなかった、でも人が生きていくには必要な仕事のいくつかは機械に取って代わられ、その意味も価値も問われなくなつてし

まったような気がする。機械がするのだからできて当たり前なのであろうか。余った時間は別のことに振り向けられる。いや、別のことをするために、家事労働という生きることで基本的な行為の軽減短縮が要請されているのかもしれない。その結果、掃除、洗濯、食器洗いなどにも価値を見いだし楽しむことや人が少なくなってきたといえないうだろうか。機械に頼れなくなったときに、片手間でなく家事に向き合うときに、おもしろさを発見し味わうことができるのかもしれない（家事は毎日同じようなことの繰り返しではない）もあり、誰もが楽しみを見つけられるものではない（と思うが）。投書をした人は、母親が手で洗濯をしていた時代に育った人であろう。自分でも手洗いの体験を持っていたのかもしれない。でも今の子どもたちは、多分洗濯機しか知らないと思う。たいていのことが機械まかせにできる時代だけれども、子どものときに洗濯など自分で実際にしてみる体験は必要なのだろうか。それよりも、変化する環境に順応し、どん

ん進化していく機器を使いこなせる力を身につけていくことの方が求められていくのだろうか。

お年寄りの生きる力

痴呆症のお年寄りが少数で暮らすグループホームに私がかかわるようになったのは、二年ほど前のことである。そこでは、ひとりひとりが自分のペースでゆつくりのんびり暮らせることをモットーに、スタッフ（職員）が利用者（入居者）の暮らしを支え介護をしていた。スタッフは利用者の話し相手になり、買い物に行きたいといえばつきあい、桜が咲けばお弁当を用意し利用者をお花見に連れ出してもいた。そこでの時間は確かにゆつたりと流れてはいたが、生活そのものは、スタッフが家事をこなし、利用者の身の回りの世話をし、時に起こるけんかの仲裁もすることによつ



て支えられていた。そんな状況が半年ほど前から一変したのである。

きっかけは利用者のことばだったという。そこで暮らすようになって半年、一年経った頃、「ここはいいところだけど、退屈ね」と利用者と言われることにスタッフは大きなショックを受け、「ここには利用者自身が暮らしを考えるきっかけが少ない」ことに思いいたる。そして、「自分の暮らしは自分で考えるからその楽しみや大変さを感じ、生きている実感を楽しむ」と感じて、「利用者に暮らしを返す」ためのスタッフの努力が始まる。大変な期間になることは覚悟の上で、「利用者が自分の暮らしを自分のものにしたその先で、ここを利用し自分で暮らすことの楽しさを味わってもらえれば」と願い、改革に取り組んでいった。

スタッフと利用者の話し合いがもたれ、まず食事作りが利用者の手に委ねられた。当番を決め、スタッフは時間をかけて利用者の作る気持ちを掘り起こし、で

きないことは手助けしていった。利用者が自分で生活しやすいように利用者の視点で環境を見直し、自分でやった方がずっと効率的なことも利用者自身が自分の力を使ってできるように、スタッフはひとりひとりの力を見極めながら忍耐強く気長に働きかけていった。利用者によっては自分で作ることが理解できずに、食べるものがなくて困惑することもありたりしたが、次第に長い間の食事作りの体験が呼び覚まされ、献立を考えたり、買い物に行ったり、作ったりなどが自然にできるようになっていった。今では当番制もなくなり、利用者がそれぞれ自分の食べたいものを考え、作り、時には分け合うこともあるという。それに伴い、食事作りに限らず日常のいろいろなことも、利用者自らが積極的にやろうとするようになってきている（もちろんそれぞれの持っている力、やれることには違いがあるが）。私が訪問すると、以前はほーっといすに座っていただけの人が、「よく来たね」といってお茶を入れてくれたりする。

このグループホームで、利用者の体力や能力をできるだけ落とさないようにすることを目指して取り入れられたのは、家事をこなすことであつた。食べるごと、清潔さを保つことなどは生活に直接結びつく。高齢者にとつて家事をすることは、生きることを具体的に実現することなのかもしれない。利用者のひとりには日本舞踊に堪能で、かつて人に教えていたこともあつたというが、毎日のほとんどを寝て過ごしていた。舞扇を見せてもなんの反応も示さなかつたのに、以前のように魚をじょうずに焼いたり洗濯物を干したりするようになつて、寝ている時間が減り、脚力もついついあつた。

この利用者は全員女性、長い間主婦といわれる役割を担ってきた人たちである。家事は、好きかどうかは別として、機械におまかせできない頃から長年やり続けてきている。そういう人たちだからこそ、家事をすることで生活力が蘇つたのであろうか。それとも、生きることに直接結びつくような行為は、生活力を育

てたり維持したりする作用があるのだろうか。

子どもと環境

このところIT技術の進歩はめざましいようである。食洗機どころか、近い将来には、汚れの程度に応じて洗い方を変える洗濯機や、自分で掃除をしてくれるロボット型の掃除機などの家電製品に囲まれた生活が実現しそうである。人手に頼っていた仕事は機械がこなしてくれるようになり、その機械は人の考える余地を残さないほどに自動化されていくだろう。また、生活に必要なものの大半はすでに製品化されて店頭に並べられ、かごに入れてレジに並ぶだけで手に入れることができる。ひとつひとつの製品がどうやって生み出されてきたのか、知る機会はほとんどない。そういう生活の中では、自分の暮らしを自分で作っているという実感は味わいにくいのではないだろうか。暮らしを作っていくには大変さとともに楽しさおもしろさもあるはずである。「自分の暮らしは自分で考えるから

その楽しみや大変さを感じ、生きている実感を味わう」のは、高齢者に限らないのではないだろうか。

子どもたちは、日々、周りの環境と関わりながら一杯生きようとしている。けれども、大人が自分の暮らしを作っている実感のもてない環境の中にあつては、子どもの感性がどんなに豊かであつたとしても、暮らすことがどんなことかは感じとれないのではないだろうか。それとも、好奇心や時代の変化に応じた暮らしかたを感じとれる感性を育てていけば、生きる実感は味わえるようになるのだろうか。社会が変化していけば、暮らしのありようも変わるのだから。

幼稚園の環境を考えると、私はいつもこの問題にぶつかり悩む。いつの時代にあつても変わらない人の暮らしを支える力を養えるような環境を用意すべきなのか、それとも、時代の変化に応じられる能力や感性を育てることに重きをおいた環境設定を考えるべきかと。例えば掃除について考えれば、ほうきとちりとりできれいにするのか、子どもでも扱える掃除機に習熟

した方がよいのかどうか。

「生きている実感」の味わいかたは人それぞれで、また、そのときどきで違うと思う。けれども、老いて最後に残るのは生きて暮らすことに伴う実感ではないだろうか。今高齢の方たちは、自分の手で自分の暮らしを作ってきた人たちである。今の子どもたちは、暮らしを作る感覚を持たないままに育っていく可能性が大きいような気がする。子どもたちが大人になるとき、いったいどんな世の中になっているのか予想もつかないけれど、自分で生活していく体験を積んでいけば、どこでも生き生きと生きていけるのではないかと、私は今と思う。食べたり洗ったり掃除したり必要なものを作ったりなどを、なるべく簡素な道具を使って、子どもたちが個々に、あるいはみんなで興味を持っておこなえるような環境を、保育者の側が意識的に用意する必要があるような気がしてならないのである。

(二)幼稚園教諭

一日一話、読み聞かせに最適の1冊です

子どもの心に
伝えたい

お話365+1

● 7・8・9月



好評発売中

世界や日本の昔話・創作童話の中から、子どもに話して聞かせたいお話を366厳選し、一日一話に配分してあります。楽しい話、怖い話、びっくりする話など、また、美しい言葉の詩も加えています。

大人が読む手がかりとなる「ひとくちメモ」「今日は何の日？」のコラムも設けてあります。

● 1・2・3月



● 4・5・6月



● 10・11・12月



こわせ・たまみ / 平山許江 編

AB判 各212頁 各定価：本体2,200円+税

キンダーブックの
フレール館

『個と集団が育ち合う園生活』 (全5巻)

編著者 柴崎正行 (東京家政大学教授)
川合貞子 (東京家政大学助教授)
大豆生田啓友 (関東学院女子短期大学講師)

最新刊

- 第1巻 『0・1歳児クラス運営のすべて』
- 第2巻 『2歳児クラス運営のすべて』
- 第3巻 『3歳児クラス運営のすべて』
- 第4巻 『4歳児クラス運営のすべて』
- 第5巻 『5歳児クラス運営のすべて』



判型 B5判 各224~248ページ
定価：本体各1,900円＋税

●本書の構成と特徴

- ①生活する姿から
その月にあった子どもの生活する姿から様々なエピソードを提示。
- ②生活の見通しと保育者の願い
その月の生活や遊びの方向性をどう見通したかを〈読み取り〉〈願い〉〈援助〉の視点で具体的に書きあらわした。
- ③指導計画の作成と見直し
個と集団の育ち合いを生み出す実践事例と結びつけたその月の指導計画を示した。
- ④保育のアイデア
育ち合いを生み出すために知っていること、配慮することを具体的に示した。
- ⑤編者のコメント
以上の実践記録に対して、編者がどう読み取ったか、個と集団の育ち合いを生み出すためのポイントについてコメントした。

個と集団の育ち合いを生み出すための指導計画を求めている保育者のみなさんに贈ります。

一人ひとりの子どもを生かしながら、クラスもスムーズに運営したいという保育者の切実な願いに
応えるための参考書です。

キンダーブックの
フレール館